

第二節 保管費

201p 「単なる価値の形態変換から考察された流通」、 $W' - G'$ と $G - W$ に伴う流通費(営業・事務・貨幣)は、商品価値には入らず、「生産的に支出された資本からの控除」である。

○生産過程で生産した価値を、流通費は「食いつぶす・消費してしまう」。
流通費は、「不生産的」な労働支出である。補填されず、剰余価値も生まない。

4L しかし、「保管費という流通費」は、「流通で続行される、したがってその生産的性格を流通形態によって蔽われているにすぎない生産過程から生じうるものである。」

○保管費は、「生産過程」に属する、生産過程の延長。
以前の生産過程ではロス・廃棄されていた生産物の一部を救い、商品とする。
つまり、以前より「個別資本の使用価値と価値」を増やしている。
使用価値と価値を「増やす」過程は生産過程の効果である。

5L 他面で保管費は、「社会的に見れば単なる費用」であり、生きた労働なり対象化された労働なりの、「不生産的支出」なのである。

★ただし、「社会的」には、「単なる費用・不生産的支出」である。
社会的な「総需要＝総消費＝総実現価値」は、増えるわけではなく、不変である。
総実現価値は増えないのに、「保管費だけ増えている」。不生産的な労働。

6L しかしまさにそのこと(労働の支出であること)によって、「個別資本家」にとっては価値形成的に作用し、彼の商品の販売価格への一追加分をなしうるのである。

★しかし、「個別資本」にとっては、「生産的支出」。保管で「増えた商品」は、販売され「価値実現」できる。その増えた実現価値よりも、保管費が安価であれば、補填され剰余価値を生む。
★ 「総需要が不変」で、「この個別資本の需要が増えた」ということは、「他の個別資本の商品が売れずにロス・廃棄された」、ということである。
★結論:保管費は、社会的には不生産的。だが、個別資本には生産的労働。

後2L かくして、商品に使用価値を追加することなしに(社会的総消費が不変なのに)、商品を高価にする諸費用(追加される労働としての保管費)、つまり社会にとっては「生産の空費(不生産的労働の支出)」である保管費が、個別資本家にとっては致富の源泉(生産的労働の支出)をなしうる。

202p2L 「保管費」が商品価格に付加する追加分は、これらの流通費を均等に分配する

○個別資本が獲得した「保管費(費用+剰余価値)」は、他社の販売減少分であり、これまで他社が得ていた価値が振り替わった、その意味で「社会的に負担」された費用である。

「さんま」を例として、

- ①サンマ120匹を生産する資本は、保管費を全くかけず、使用価値は「20匹がロス」になり100匹販売している、というのが社会的一般的な生産だとする。
- ②価値としては、1匹100円単価で、1万円の売り上げ。価値の構成は、 $4000c + 3000v + 3000m = 1$ 万円が社会的な一般的な生産だとする。
- ③ある個別資本が、ここに保管費を500cかけて、ロスを10匹減らし110匹を販売できた場合には、売上は1000円・剰余価値は500円増え、総資本価値は、 $4500c + 3000v + 3500m = 1.1$ 万円となる。
- ④この個別資本は「生産的労働」を行ったが、社会的には保管で総需要が増えることはないので、「同業他社のサンマ10匹」が売れ残りロスとなった。つまり、この個別資本が得た「追加価値」は、「他社の労働の不生産化＝他者の労働の収奪」の結果である。
- ⑤さらに、競争により他社も保管費500cをかけるようになり、それが社会的に一般的な生産様式

になってしまうと、「さんま」の社会的総供給量は10%増え、需給関係で価格は90円程度と1割程度下がることになる。総資本価値は、 $4500C + 3000V + 2500m = 1$ 万円、総利潤は減少する。

以上から、

★「保管」という過程が、「流通量を100匹から110匹に増やす」という点で、それは生産過程の要素、つまり「流通に流す量」を決めるのは生産過程が決める、と言える。流通自体は、「定まった量の使用価値量・W」をGに転化するだけの過程であり、「Wの増加」を含まない、ということである。・・・流通におおわれた生産過程。

★しかし、「保管」によって生産物の供給量が増えるとしても、「総使用価値＝総消費量＝総需要が増えるわけではない」。社会的な総消費量＝「総使用価値の量」が不変なのに、以前に比べて保管費という「追加労働」が余計に消費されていることになる。

★また、③のように、社会的一般的「保管」様式とは異なる、「個別資本」の「特殊な保管方法」は、価値形成的(＝保管費を補填し剰余価値も生む)場合がある。③は、相対的剰余価値生産での「特別剰余価値」の生まれ方と類似している。社会的平均と特殊個別との差額。

★ただし、「特別剰余価値」は、「社会的平均より労働を削減・節約すること」で得られた「価値」。しかし、③は「保管費という労働の追加・出費・空費」の支出で、それ以上の価値を実現する「使用価値・さんま10匹」の減少を防いだという点で、根本的な相違がある。

第三節 運輸費

219p後5L 諸商品の流通は、それらの物理的運動がなくても行われうるものであり、また生産物運輸は、商品流通がなくても、行われうる。

○両者は異なる概念・運動である。運輸は流通に含まれる一環ではない。

220p6L 生産物量は、その運輸によって増加するものではない。ある種の例外を除けば、害悪である。

○「保管」はロス削減で間接的に生産物量を増やすが、運輸は生産物量は増やさない。

8L しかし諸物の使用価値は、それらの消費においてのみ実現されるものであり、消費はそれらの場所変更を、したがって運輸業の追加的生産過程を、必要とすることがありうる。

★「保管」は「消費＝使用価値を増やさない」が、運輸は「消費＝使用価値を増やす」。

まとめ

★生産物の総量が増減しても、「総使用価値＝有効需要は不変」だから、「生産力も総実現価値も不変」である。「保管」は、生産物量は増やすが総使用価値を増やさない労働であり、「社会的には不生産的労働」。個別資本の保管費用と剰余価値は、他資本のシェアを奪うことで、社会的総価値が不変な中での「単なる総価値の資本間移動」という形式で行われる。

★運輸費は生産物総量は増やさないが、「総使用価値＝新たな有効需要」を増やす。販路の拡大であり、それにより「実現する使用価値も価値も増大＝生産力が増大」する、「生産的労働」である。運輸費の輸送費用と剰余価値は、以前の総価値の単なる内部移動ではなく、新たな追加価値・つまり「運輸労働の価値」自体でもたらされる。

★保管も運輸も、流通過程におおわれた「生産過程」であることは、同じである。

追加 杉村さんからの「経済学辞典」の問題

<「保管費」の解説>

①解説に、「保管そのものは生産物や商品の社会的に必要な在荷形成にともなって発生する費用としてあらゆる社会において生産的性格を持つといえる」、とあるが、全くの誤り。マルクスはそれとは逆、「あらゆる社会において、保管は『社会的に見れば』空費であり不生産的労働である」と結論している。解説者の一文は、「運輸費」でのマルクスの記述を「保管費」にも当てはめてしまい、運輸費と保管費の区別がなくなっている。つまり彼は、両者の違いを理解していない。

②また、保管費用は「流通対象の価値にはいりこむ」と解説しているが、完全に誤り。

正しくは、「個別資本の保管費は、他資本の損失・費用(シェア減少)により、流通対象の価値として実現する」、であろう。この一文も、「運輸費」との区別が理解できていない表現である。

②最も重要な、保管費は「生産量を増やすが総使用価値を増やすことがなく、社会的には不生産的労働」という根幹が、何も説明されていない。というより、「総使用価値」の観点が理解できていない。

<「運輸費」の解説>

①解説の、「運輸そのものは生産物、商品の『社会的需要』と供給を空間的に調整整合するという、いずれの社会においても必要とされる物的再生産の基本条件である」、は概ね正しい、マルクスもそう書いている。ただ、「調整整合」という表現は、本当は正確ではない。

②ただし、運輸費位全体の説明が、「保管費」の解説とほぼ全く同じ、つまり、両者を混同しており、解説を分けている意味がなくなっている。

③混同の原因は、解説者が、マルクスが言う「社会的使用価値(総消費量)を増やす運輸」と、「社会的使用価値(総消費量)を増やさない保管」、を見落としている点である。解説者は、保管も運輸も、「需要と供給を調整整合」している、と理解しているのである。